

# 鮑照の『擬阮公夜中不能寐』詩について

鈴木敏雄

魏の阮籍の『詠懷詩』其一に、

夜中不能寐 夜中 寐ぬる能はず

起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を弾ず

薄帷鑒明月 薄き帷に明月鑑り

清風吹我襟 清風は我が襟を吹く

孤鴻號外野 孤鴻は外野に号び

翔鳥鳴北林 翔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何をか見ん

憂思獨傷心 憂思して独り心を傷ましむ

とある。『文選』（卷二十三）に引く劉宋の顔延之の注に

拠れば、『詠懷詩』は、「説く者阮籍、晋文の代に在り、

常に禍患を慮る。故に此の詠を發するのみ」とあり、晋の

文王司馬昭の權勢が盛んな時代にあつて、禍患を慮つて作

られたと解されてきている。以来、次の要約のように読ま

れてきているとすることができよう。

人々がみな寝静まった夜半、ひとり端坐して琴にむかう。

寂寥は明月とともに私の周圍にたちこめ、憂愁は清風とと

もに私を揺さぶる。孤鴻や翔鳥ないしは朔鳥、すなわちこ

の世に於ける不幸なもの（司馬氏の下剋上の不幸な犠牲と

なつた魏の王室のおさない天子たち他）は外かなる野や北

の林にさけび鳴く。この複雑な現実に対処するすべなく月

光の下を徘徊する私は、不幸なもの以外の何ものをも發見

し得ず、かくて憂いのなかで感情の孤独を訴えるのである。

「翔鳥鳴北林」の一句について、吉川幸次郎氏は、翔鳥

ないしは朔鳥すなわちこの世の邪悪なもの（魏の帝位を奪

おうとする司馬氏の党派）は北の林に鳴きさわぐ、と解す

る。これは唐の呂尚の『文選』五臣注、元の劉履の『選詩

補注』などの説に拠るが、顔延之、沈約、唐の李善の『文

選』注はこれに関して言及せず、近人の黄節氏、古直氏は

『詩』秦風・晨風の「馱たる彼の晨風、鬱たる彼の北林」

をもって注する。詳細は後述することとし、今は黄・古両

氏の説に拠つた。

さて、『詠懷詩』其一是、樂府古辞『傷歌行』<sup>法③</sup>の、

昭昭素明月、暉光燭我牀。

憂人不能寐、耿耿夜何長。

微風吹闥闈、羅帷自飄颻。

攬衣曳長帶、履屨下高堂。

東西安所之、徘徊以彷徨。

春鳥驟南飛、翩翩獨翱翔。

悲聲命儔匹、哀鳴傷我腸。

感物懷所思、泣涕忽沾裳。

佇立吐高吟、舒憤訴穹蒼。

および『古詩十九首』其十九の、

明月何皎皎、照我羅床幃。

憂愁不能寐、攬衣起徘徊。

客行雖云樂、不如早旋歸。

出戶獨彷徨、愁思當告誰。

引領還入房、淚下沾裳衣。

を参照したと考えられるが。劉宋の鮑照は、これらを踏まえ、この『詠懷詩』其一到擬した。

漏分不能臥 漏分 臥す能はず

酌酒亂繁憂 酒を酌んで繁憂を乱らす

惠氣憑夜清 惠気は夜に憑つて清く

素景緣隙流 素景は隙に縁つて流る

鳴鶴時一聞 鳴鶴 時に一たび聞こえ

千里絶無儔 千里 絶えて儔無し

佇立爲誰久 佇立して誰がためにか久しうせん

寂寞空自愁 寂寞として空しく自ら愁へしむ

水時計に目をやれば夜半、

ひとり酒をくんで複雑な憂いをまぎらす。

和める風は夜の深まるにつれて清く、

照覧の月明かりは壁際にそつて流れる。

鳴く鶴の声がその折ちよつと聞こえたが、

応じて鳴くものは全くどこにもいない。

誰かのために待とうとして月光の下に立ちつくす私は、

誰のためともなり得ず、

かくてもものも言えず、えも言われぬ愁いにさいなまれる

のである。

以下、鮑照が『擬阮公夜中不能寐』詩を作った意図について述べようと思うが、予め、擬作という文学活動について一言しておきたい。

まず、「擬」という継承性について言えば、例えば、鮑照の『擬阮公夜中不能寐』詩（擬作）は、五言八句、一韻到底式の古詩で、阮籍の『詠懷詩』其一到（原作）と型を同じくする。また、この擬作の各句は、基本的には原作の一聯二句ごとの言い換えから成る。擬作詩の継承の型には、「擬」のほか、「学○○体」、「代（樂府）」などがある

が、その中で「擬」は、原則として或る特定の対象作品一首（原作）と句数および押韻形式を同じくし、さらに構成を同じくするものであると定義できる。ただし、例えば晋の傅玄の『擬四愁詩』のように、原作に対する批判が強く、この定義を逸脱するものもある。

次に、「擬」の特徴の一つである一聯二句ごとの言い換えについて、その機能を見ると、例えば『古詩十九首』其三の結二句は、

古詩

極宴娛心意  
戚戚何所迫

陸機

擬古  
其八

遨遊放情願  
慷慨爲誰歎

鮑照

擬青  
陵上柏

娛生信非謬  
安用求多賢

韋応物

擬古  
其三

游泳屬芳時  
平生自云畢

④

のように言い換えられる。不遇の故に享樂主義に流れる古詩に対し、晋の陸機はそれとほぼ同様の認識をし（「戚戚」と「慷慨」の差異はしばらく措く）、鮑照は天子の求めに応じないことこそ生を娛しませるものであるとの認識に至

り、唐の韋応物は拘束されずに自由に動けるのは若い時の特権であるとの認識に達する。「極宴」を「遨遊」とするような同一概念による言い換えは、原作とほぼ認識を同じくし、「戚戚何ぞ迫る所ぞ」を「安んぞ多賢を求むるを用ゐん」とするよう、別概念に基づいて措辞を変える部分は、原作と認識を異にすることが多い。「擬」の継承をする擬作詩は、基本的にこの方式で一篇が統括される。

ところで、一篇の大部分が言い換えで成り立つというところは、やはり擬作であつて、創作ではない。例えば、陸機の句はそれだけで充分にその思想感情を伝え得るが、それが古詩の擬作であると銘打たれた時、古詩の句と対置され、いつそう表現効果が増す。すなわち、擬作は創作とちがひ、原作と対比されることで成立する。後世の批評の中で、例えば清の王士禛の『池北偶談』談藝篇「擬古」の条に、「今人の擬古は、牀上に牀を安くがごとし」と言うのは、原作との対置が不成立であることの指摘である。擬作する者は、この点に十分な注意を払つていたと考えられる。

そこで、原作との対置効果を擬作が有効に發揮しようとする時、原作の理解を充分なものにしておく必要が生まれる。例えば、鮑照が古詩に擬して「生を娛しましむるは信に謬りに非ず」と言うには、原作の句意を、鮑照なりに把握しておくなくてはならない。それがあつて初めて原作の「極宴」の二句を肯定的に評価でき、それを「娛生」と言

い換えて、「信非謬」と言い切れる。そしてさらに、原作に無い認識の「安用求多賢」を、次句に加えることも可能になるが、それを加えたということは、擬作する者の、原作に対する単なる言い換えでは満たされない思いを反映する。つまり、鮑照なりの文学観に根ざした広義の批評行為にもなり得る。具体的に言えば、原作は『楚辞』九章・悲回風の「居は戚々（おもしろ）として解くべからず」に見られる、景慕する人物にめぐり会えない憂いを踏まえる。陸機はそれを『説文解字』の「忼慨は、壮士 志を心に得ざるなり」に見られる、志を得ない壮士の憂いを用いて、捉えなおした。しかし、原作・陸機ともに、享楽に流れる動機がまだ明かされない。そこで鮑照は、『後漢書』蔡邕傳の「賢を求むるの道は、未だ必ずしも一途ならず。或は徳を以て顕はし、或は言を以て揚ぐ」などに見られるような賢人登用の考へ方の反措定をおこない、享楽の動機を明言した。ここに原作との対置関係が生じ、鮑照の句意が際立つ。擬作の意図も、言い換えによってこの効果をあげるところに存することができる。

以上で述べたところに基づき、『擬阮公夜中不能寐』詩の擬作意図について、同様の考察を試みてみる。

原作および擬作が描こうとするのは、ともに政権交替時の乱世において、篡奪者側に在り、それを譏（さ）らうにも譏ら

れないやるせなさ、我が身を苛む憂いであろう（擬作が描く具体的内容は後述する）。『文選』李善注に言う「憂生の嗟き」である。この概念を両者がいかに認識し、表現したのか、さらに両者の間に認識の差異が確認できれば、そこには鮑照の阮籍に対するいかなる評価が込められているのか、詩の構成順に二句一聯ごとの対比を行ない、その詳細にあたってみる。

夜中不能寐  
起坐彈鳴琴  
↓  
漏分不能臥  
酌酒亂繁憂

まず、第一聯（第一・二句目）であるが、冒頭の「漏分」は、『周礼』挈壺氏の「壺を懸け、……水火を以てこれを守り、分くるに日夜を以てす」を踏まえていよう。清の段玉裁は、『説文解字』「漏」字注に宋代の偽書かと疑われる『靈枢経』を引き、「漏水 下ること百刻、以て昼夜を分かつ」と括るが、ここではその昼の時間帯から通常人ならば床につくところの夜の時間帯に入ったことを言うものと考えられる。水時計は一般に一昼夜を百刻に分ち、昼間は「昼漏」、夜間は「夜漏」で時を計る。その「昼漏」から「夜漏」に移ったことを、鮑照独特の縮約した表現で言い括ったのが「漏分」であろう。原作の「夜中」の言い換えに近い。同様に、「臥」は「寐」の、「酌酒」は「彈……琴」の、それぞれ言い換えであると見られる。

また、「起坐」については、言い換えをせずに「乱繁憂」と措き、措辞に変位を与えた。しかし、もとの概念に交替が無いところから、鮑照が行なった解釈であると考えたい。「起坐」は、漢の王褒の「僮約」に「馬牛を餽食するに、鼓すること四たびにして起坐し、夜半藟を益す」とあるなど、夜半に何らかの故あつて目覚めている状態を言う。ところで、阮籍のこの句は「古詩十九首」其十九の「憂愁寐ぬる能はず、衣を攪り起つて徘徊す」をも承けると考えられ、阮籍にとつての故というのは憂いである。一方、鮑照の「乱……憂」も忘憂の意に解し得、「詩」邶風・柏舟の、

耿耿不寐、如有隱憂。

微我無酒、以敖以遊。

以来、樂府古辞「傷歌行」（前掲）などに詠み継がれる。「憂」字を承け、その憂いの処理に苦慮する様子を述べる。擬作の方は一聯の中に「憂」字が措かれるので説明的に墮する感を免れないが、句意は原作に近いことから、そこには、鮑照が原作をそのように解釈しようとした意図が窺われることになる。二句を総じて見れば、原作を肯定的に承けていると言えよう。

薄帷鑒明月  
清風吹我襟

惠氣憑夜清  
素景緣隙流

ついで、第二聯（第三・四句目）は、対句の形式を原作とは異にし、「明月」を言い換えて「素景」とし、「清風」を言い換えて「惠氣」として、それぞれを並列させた。このことにより、原作の第三聯の「孤鴻」と「翔鳥」の対に見られるような寓意性が顕著になる。

近人の錢仲聯氏の鮑照年表に拠れば、劉宋の文帝の元嘉二十四年（四四七年）以来、始興王濬の侍郎であつた鮑照は、元嘉二十八年（四五一年）その任を辞し、翌、元嘉二十九年、南兗州から建業に返る。ところが、さらに翌、元嘉三十年（四五三年）かつての恩人である始興王は、太子劭の叛逆に従い、文帝を弑した廉で、後の孝武帝駿の誅に伏した。いわゆる元凶劭の巫蠱事件もしくは弑逆事件と呼ばれるものである。時に鮑照は、駿の將軍となる柳元景に招かれていたと推定される。事件の報に接し、その心中は複雑であつたに違いない。

事件の経緯に関しては、中森健二氏の『鮑照の文學』に詳しいが、氏は鮑照の『中興歌』十首をこの事件直後の作であるとす。いま、この『中興歌』に、「勅あつて柳元景のために作る」とされる『侍宴覆舟山』詩二首を加味した上でこれらに注目すると、孝武帝駿と柳元景を、

祥景照玉臺、紫煙遊鳳閣。

中興歌 其二

明暉燦神都、麗氣冠華甸。

侍宴覆舟山 其一

繁霜飛玉闌、愛景麗皇州。

同右 其二

などの表現で寓意的に表していることに気付く。鮑照の『擬阮公夜中不能寐』詩の制作年代は詳かでないが、この擬作中の「恵気」と「素景」とが、『中興歌』および『侍宴覆舟山』詩に見えた「麗気」や「祥景」、「愛景」と用法が類似することから、仮りに、駿と柳元景とを寓するものであるとするならば、そして原作の第三聯のように寓意的に解し得るとすれば、当時の鮑照の私的な立場での心情を知ることができ、且つ、擬作の理解も深まる。この仮説に基づき、孝武帝を寓する「恵気」と柳元景を寓する「素景」とに対し、寂寥と憂愁の念を抱く自己を提出したのが第二聯であると考えたい。とすれば、第一聯の「繁憂」の具体的な内容も、自ずと明らかになるう。

元来「恵気」は、『楚辞』天問に「伯強は何れの処ぞ、恵気は安くにか在る」と言うところの、役病神伯強の気を和ませる風を言う。また「素景」は、阮籍の四言『詠懐詩』其七に「素景は光を垂れ、明星に爛ること有り」と言い、晋の陸雲の『喜霽賦』に「朱光は斐牖に播かれ、素景は中閨に衍かる。天監 照と作り、幽明 畢く覲さる」というところの、天照の光を言う。「素景」は「明星」を爛れさせてしまうこともあるが、いま、これらを「恵風」、「素月」と解してもよいならば、陸機の『擬古』其十一に「恵風は我が懐に入る」と詠まれ、『傷歌行』にも「昭々たり素明の月」と詠まれるように、憂愁のイメージを伴うもので

あると言うことができる。鮑照も、阮籍の原作がそうであったように、「恵気」、「素景」を憂愁のイメージを想起させるものとして捉えていたようである。

さて、鮑照は、憂いが、それぞれ「憑夜清」、「縁隙流」というかたちでしのび寄ると言う。原作の「薄帷」、「我襟」の単なる言い換えをせず、それとは別概念の語句を措いたところに、独自の判断になる認識が現れることになる。「薄帷」と「我襟」は、古直氏の『阮嗣宗詠懐詩箋』に拠れば、『古詩十九首』其十九（前掲）の「明月は何ぞ皎々たる、我が羅床の幃を照らす」に基づくとする。『傷歌行』（前掲）の「昭々たり素明の月、暉光は我が牀を燭らす」……微風は閨闈を吹き、羅帷は自ら飄颻す」の語句も借りていると考えられるが、これらに共通して現れる「我」字が擬作では除かれた。原作に負うのが擬作であるから、言わずとも「我」は想起される。しかしその「我」が、原作の「帷」と「襟」の概念からは直接に想起されない「夜」と「隙」の狭間で憂えるものとして提示されたところには、鮑照独自の概念の付与が見られる。そして同時に、意識的でないにせよ、原作に対する批評が働き、対置効果が生じる。それは、『古詩十九首』や『傷歌行』の語句を踏襲し、従来の句法をあまり外れず、憂いのみを象徴する原作に対し、鮑照が抱くところの、昏迷の時代を肅静した者、およびその一隅にあつて力を得た者があつたことに関わる概念

を、寓意とは言ってもより明瞭な「夜」「隙」という表現で、対置させたことになる。

一体「夜」は、現存の鮑照の詩文（南齊の虞炎の推定では約半数）の中に、六十例近く散見する。当時の文人の中では、使用頻度が比較的高い方ではないかと考えられるが、その用例中で、

涉脩夜之長寂、信專思而知哀。野鶴賦

念此憂如何、夜長愁更多。擬古其七

など、長い夜が哀寂や憂愁と結び付けられた表現に着目してみる。これらは、前掲の『詩』邶風・柏舟の、

耿耿不寐、如有隱憂。

を承けた『楚辭』遠遊の、

夜耿耿而不寐兮、魂恍恍而至曙。

に拠ろう（王逸は「憂ふるに愁戚を以てし、目は眠らざるなり」云々と注する）。また、阮籍の四言『詠懷詩』其三にも、

清風肅肅、脩夜漫漫。

嘯歌傷懷、獨寐寤言。

……

とある。さらに原作の冒頭に「夜」字が見え、五臣注『文選』の注釈者の一人である呂延濟は、「夜中は昏乱に喩ふ」と注する。その適否はともかく、鮑照には「夜」を昏乱に喩え、それを憂えたものの例が一例見出せる。それは、恰

も暗合したかのようであるが、この擬作と前後して作られたと推定されている、前述の『中興歌』十首の其一、

千冬逢一春、萬夜見朝日。

生平值中興、歡起百憂畢。

の中に現れた「夜」である。このいつまでも続く夜は、既述の元凶劭による文帝弒逆事件をめぐる抗争を指す。そしてその「万夜」を明けさせた「朝日」が劉駿であり、柳元景である。とすれば、ここで問題としている「憑夜清」の「夜」も、この事件に喩えることが可能である。つまり、「惠氣憑夜清」の一句は、孝武帝駿が文帝弒逆事件に乗じて世を治めようとする状態を意味する。また、これと対になる「素景縁隙流」の一句も、柳元景がその間隙をぬつてのし上がってきた状態を意味することになる。「隙」（「隙」に作るのは古字）の使用は、鮑照においては五例に過ぎず、一例が怨みの意で用いられるほかは、皆『淮南子』説山訓の「光を隙に受くれば、一隅を照らす。……受くる所の者小さければ、則ち見る所の者浅し」に言うすき間の意である。しかし、『韓非子』亡徴に、「木の折るるや必ず蠹に通る、牆の壊るるや必ず隙に通る。然れども、木は蠹と雖も疾風無くんば折れず、牆は隙と雖も大雨無くんば壊れず」と言うように、つけ入る隙にも喩えられる。鮑照はこの意味に用いていると思われる。

以上に述べた「夜」と「隙」とに拠り、鮑照は第二聯に

阮籍と概念を異にする「氣」<sup>(カキ)</sup>と「景」<sup>(ツキ)</sup>とを措き、無意識にせよ、原詩の寓意の不明瞭さを批評し、自己の抱く概念を対置的に提示したと考えたい。

孤鴻號外野  
翔鳥鳴北林

↓

鳴鶴時一聞  
千里絕無儔

そこで第三聯（第五・六句目）に繋がるが、この聯も対句の形式を原作と異にする。この異差は二つの場合に起因する。原作が「孤鴻」と「翔鳥」の二種の鳥を用いてその概念を対に作るのに対し、擬作はこれを「鳴鶴」という一種類の鳥で言い換えた。それは一つに、原作の下句を削除し、そこに別概念を導入した場合と、二つに、原作の二句を一括してしまった場合とが考えられる。

原作のこの二句について、その寓意を捉えなおしてみると、五臣注『文選』の施注者の一人である呂尚は、「孤鴻は、賢臣の孤独にして外に在るに喩ふ。翔鳥は鷺鳥なれば、以て権臣の近きに在るに比し、晋の文王を謂ふ」と言う。劉履の『選詩補注』もこれを採り、清の蔣師煇も「号ぶは自ら哀れみ、鳴くは自ら楽しむ」と言う。「孤鴻」と「翔鳥」を対比的に捉え、前者を外に在って哀れげな賢臣、後者を帝の近くに在って榮しげな権臣と見るわけである。これに対し、顔延之、沈約、李善はこのことに言及せず、さらにそれに対し、古直氏は「詩」小雅・鴻鴈の「鴻鴈于き

飛び、哀鳴嗷々たり」とその鄭箋の「鴻は陰陽寒暑を避くるを知れば、民の無道を去つて有道に就くを知るに喩ふ」、および「詩」秦風・晨風の「馱たり彼の晨風、鬱たり彼の北林」（前掲）を引く。また黄節氏も下の句については古氏に同じで、上の句については『左傳』昭公二十五年の「童謡にこれ有り、曰く、鸚よ鶴よ、公出でてこれを辱めらる。鸚鶴の羽、公は外野に在り、と」を引き、「孤鴻」と「翔鳥」を並列的に捉えて、ともに権力の外に在る者とする。

ここで、第六句目に関する鮑照の立場を明らかにしなければならぬが、当時、原詩のこの部分には顔延之も注を施さなかつたので、当時の一般論に帰すると、関鍵は「北林」に在ろう。鮑照がこれを帝の近くとつたか外野とつたかで、「翔鳥鳴北林」の寓意を決定したい。

「北林」の用例の多くは、魏代に見える。例えば、次のような例が挙げられる。

飛鳥翻翔舞、悲鳴集北林。曹丕 善哉行

願爲晨風鳥、雙飛翔北林。同右 清河作

高臺多悲風、朝日照北林。曹植 雜詩其一

出門當何顧、徘徊步北林、

下有交頸獸、仰見雙棲禽。同右 種葛篇

日匿景兮天微陰、經迴路兮造北林。同右 離友

零雨降集、飄溢北林、

汎汎輕舟、載浮載沉。阮籍 四言詠懷詩其四

我徂北林、遊彼河濱、

……

隱鳳棲翼、潜龍躍鱗。同右  
其十一

この中で、魏の文帝曹丕の二例はいづれも「鳥」と関わり、特に『清河作』詩は「晨風」を提示するので、『詩』の「晨風」を踏まえることは明らかである。『善哉行』の「飛鳥」が舞う北林も、恐らくこれに準じよう。曹植と阮籍の例も、「晨風」との関わりは直接に見られないが、『種葛篇』の「北林」は「門を出で」た所に在って、一対の「交頸獸」や「双棲禽」が棲まう。四言『詠懷詩』其十一の「北林」も「隱鳳」が棲まい、ともに外野が想定される。『離友』詩（佚文）の「北林」は「廻かなる路を経て造る」所に在り、これも外野であろう。ただ、『雜詩』六首・其一の「北林」は李善が「北林は狭なるを言ひ、小人に比喩す」と言ひ、四言『詠懷詩』其四の「北林」も流れに隨う「輕舟」が浮沈する所であって、いづれとも決め難い。鮑照には「北林」の用例が無いが、特に魏代の「北林」は鳥との関連がある場合は外野を指すので、鮑照も鳥との関連から原作の「北林」を外野とする立場をとったものと思われる。原作の「翔鳥鳴北林」の句意を、鮑照が不幸なもの姿として捉えたこととすると、対になる「孤鴻号外野」と同一趣向の句と見たことになり、擬作は原作の第三聯を一句に纏める立場をとったことになる。つまり、「鳴鶴」は原作の

「孤鴻」、「翔鳥」の言い換えであり、「千里」は「外野」「北林」の言い換えである。そしてその上で「絶えて儔無し」を加えた。

「千里絶無儔」の「絶無儔」は、原作の「孤鴻」の「孤」を承けつつ、原作の措辞を変えて作つてある。原作は「号」と言い「鳴」と言つても、鳴号する原因を明かさない。擬作はそれを「聞」で承け、並んで飛べるものがないと明言した。つまり解釈が働いた。鮑照が「孤鴻」「翔鳥」の鳴号の原因を「絶えて儔無し」に在るとしたのは、自己の概念の付与とともに、やはり原作に対する批評意識が働いていよう。自己の概念の付与としては、元凶劾ら、とりわけかつての恩人である始興王の姿が彷彿する。加担はできず、ただその悲鳴を聞くよりほかに仕方の無かつた鮑照の、複雑な立場が思われる表現である。また批評としては、鳥の概念の認識が問題となる。阮籍の描いた鳥は、古直氏の注に拠れば、「無道」に対して鳴くものであるのに対し、鮑照のは、そのように認識されていない。『傷歌行』の「春鳥は隸つて南のかたに飛び、翮々として独り翱翔す。悲声儔匹を命め、哀鳴我が腸を傷ましむ」を承け、『易』中孚・九二の「鳴鶴陰に在り、其の子これに和す」をも踏まえ、王弼注に言う「内に処りて重陰の下に居り、而も履むに中を失はず、外に徇はざるは、其の真に任ずる者なり。誠を立てて篤く至れば、闇昧に在りと雖も、物は亦たこれ

に「応ず」の反措定を行っている。「鳴鶴」は悪条件のもとでも中立を失わず、外の動きに従わなければ、応じて鳴くものもあるところを、それに反したために、儔匹を無くすことになる。つまり、鮑照の認識した鳥は、孤立によって鳴くものであり、原作と対置される。「傷歌行」の語句を踏襲し、阮籍のような寓意性の過大な表現は避け、感情の由来を明瞭にした。その上で鳥の孤立を描いたところに、鮑照の価値観が現れる。

「徘徊將何見」  
「憂思獨傷心」  
↓  
「佇立爲誰久」  
「寂寞空自愁」

結局の二句、すなわち第四聯（第七・八句目）は、殆ど言い換えから成り立っている。それぞれ、「佇立」は「徘徊」を（その動きの異差はしばらく措く）、「為誰久」は「將何見」を、「寂寞」は「憂思」を、そして「空自愁」は「獨傷心」を、言い換えている。ただし、結二句は一篇の全てを承けるので、言い換えとはいっても、内包する概念は異なる部分がある。特に擬作の「為誰久」と「寂寞」である。「為誰久」はある人物を想定した表現であるのに対し、原作の「將何見」はある事件を想定する。また、「寂寞」は「淮南子」齊俗訓に「蕭条は、形の君にして、寂寞は、音の主なり」とあるように、本来は全ての音を有する状態を言う。恰も「蕭条」や「虚無」があらゆる有形を蔽

しているかのようにである。それが一般、およびここでは、『説文解字』に「寂は、人の声無きなり」と言い、薛君『韓詩章句』に「寂は、声無きの貌なり。漠は、静かなり」と言うように、無声の意味に使われ、言いたい事を言えずにいる状態を表す。原作の「憂思」とは、対象に対する思いの吐露の仕方が異なる。

因みに、原作の「徘徊」、擬作の「佇立」は、それぞれ『傷歌行』の「東西 安くにか之く所ぞ、徘徊して以て彷徨す。……佇立して高吟を吐き、憤りを舒べて穹蒼に訴ふ」の語句を借用する。これらの、冒頭に掲げた樂府古辞『傷歌行』および『古詩十九首』其十九の語句の襲用について、鮑照は、阮籍の用いたものは採らず、用いなかったものを採る。このようなところにも、原作に対する対置意識が意図的に働いていると言える。

以上、阮籍（原作）と鮑照（擬作）の作品の二句ごとの対比を、その構成順に試みることで、両者の「憂生の嗟き」の表現に概念上の認識の違いがあることを見てきた。阮籍においては世相に対する憂い、鮑照においては対人関係に発する憂いが、それぞれの基盤にあると言えよう。他方、概念の基盤に相違が認められるにもかかわらず、鮑照は原作の表現形式から、大きくは離脱しようとしなない。そこには、阮籍の表現形式（主として寓意性に関するそれ）を肯

定的に評価しようとする意識も察せられよう。

鮑照は、自らと阮籍との差異を、成立年代未詳の『謝解禁止表』で、

奇なるは阮籍に非ざれば、保持の助無し。才は馮衍に愧づるも、鞅轆の困しみ有り。

と言う。この表は、恐らく、始興王濬の侍郎職を辞する際に上った『侍郎報滿辭閣疏』と相前後して作られたのではないかと推定される。それは、ともに自らの性を「猖狂」と言い、且つ自らを後漢の不遇の人馮衍になぞらえた記載が見えることに拠る。『侍郎報滿辭閣疏』には、

臣、……幼くして性は猖狂、頑なるに因つて勇を慕ひ、擔ふを積めて書を受け、耕すを廢めて文を学ぶ。虎を画きて既に敗れ、歩を学んで成る無く、反つて歸趾に拙く、還た鷲雀よも陋し。日晏れて途遠く、塊然として自ら喪ひ、加ふるに良無きを以てし、根は孤にして伎は薄し。既に馮衍負困の累ひに同じく、復た相如消渴の疾ひを抱く。……

とある。馮衍は將軍職の職責を全うできずにひとり帝に黜けられ、外戚と交わりを結んで帝に罪を得、さらに、文がその実に過ぎるとそしられて家を廢された。その不遇を決定的にしたのは嫉妬深い女を妻に娶ったことで、『後漢書』の本傳には「……遂に時に培塿す」と記すように、ここに

至つて全てがうまくゆかなくなつてしまつた。「培塿」は「坎廙」、「鞅轆」も同じで、宋玉の『九弁』の「坎廙兮」王逸注に、「数しば患禍に遭つて、身の困窮するなり」とあるような状態を言う。鮑照は、前掲の『侍郎報滿辭閣疏』で「擔ふを積めて書を受け、耕すを廢めて文を学ぶ」と言い、唐の李延寿の『南史』劉義慶傳にも、

照始め嘗て義慶に謁して未だ知られず、詩を貢つて志を言はんと欲す。人これを止めて曰はく、卿位尚ほ卑しきに、軽がるしく大王に忤ふべからず、と。照勃然として曰はく、千載より上に英才異士の沈没して聞こえざる者有り、安んぞ數ふべけんや。大丈夫豈に遂に知能を蘊むも、蘭と艾と辨ぜざらしめ、終日碌々として、燕雀と相隨はんや、と。是に於いて詩を奏し、義慶これを奇とす。

とあるように、文才で身を立てようとした。それは『莊子』山木篇に「義の適ふ所を知らず、礼の將ふ所を知らず。猖狂にして妄りに行ふ、……」とあるように、礼義知らずの行為でもあつたが、寒門の出であるが故に、事あるごとに、身を立てることに行き悩んだ。恰も馮衍が困窮の要因をもつていたようである。それを鮑照は「才愧馮衍、有鞅轆之困」と言い、「同馮衍負困之累」と言つた。

一方、阮籍はといえば、魏の嵇康の『与山巨源絶交書』に、

阮嗣宗は口に人の過ちを論ぜず。吾毎ごとにこれを師とするも、未だ及ぶ能はず。至性 人に過ぎ、物と傷つくる無く、唯だ酒を飲んで過差するのみ。礼法の士のために繩せられ、これを疾やくむこと讎のごとくに至つては、幸に大將軍のこれを保持するに頼るのみ。……

とあるように、人の過ちを口にせず、人を傷つけることが無かつたので、礼に合わない行為があつても、大將軍司馬昭の「保持」に頼ることができた。それは阮籍自身も「詠懐詩」其二十に「嗟々塗上の土、何を用つて自ら保持する」と言うように、常に患禍を慮り、「保持」には慎重であつたからであろう。魏の李康の『家誠』には司馬昭の言葉を引き、

……天下の至慎なる者は、其れ唯だ阮嗣宗のみか。これと云う毎に、言は玄遠に及び、而して未だ嘗て時事を評論し、人物を臧否せず。至慎と謂ふべきか。

と云うのも、阮籍の「至慎」の態度が「保持の助」をもたらししていることを物語る。まさに鮑照の評する「奇」である。

「奇」は鮑照の詩文に十例あまり見られる。その半数以上は、例えば、

蜀漢多奇山、仰望與雲平。

擬古 其八

殊物藏珍怪、奇心隱仙籍。

從登香 樓峯

酒出野田稻、菊生高岡草、

味貌復何奇、能令君傾倒。上 答休上人  
のように、群を抜いて秀でるさまを意味するが、他に例え

雖凌群以擅奇、終從歲而零歇。芙蓉 賦

誠愛秦王之奇勇、不願絕筋而稱力。遊思 賦

凌清瞰遠、擅奇含秀、是亦居勢使之然也、故才之多少、

不如勢之多少遠矣。瓜步山 博文

のような用例が見られる。「芙蓉」は群を凌いで美しいが、時期が来れば凋み、秦の武王は力を誇つたが、力士と競つて膝の筋を切り、「瓜步山」という小山は他の「清」なる風景を凌ぐが、地理的な「勢」としてそうであるまでのこと、というように、鮑照は「奇」を、危うさとうらはらの状態で秀でているものにも適用する。阮籍を「奇」と評するのも、この含みをもたせてであろう。

鮑照は、自分には及ばない「奇」なる阮籍の秘訣が、司馬昭の言つた「至慎」と表裏をなす「玄遠」と「保持」との関連にあると見ていたように思われる。さらに、それに加え、「詠懐詩」に注を施し、鮑照とも詩論をたたかわせたことのある顔延之の『五君詠』阮步兵に、

阮公は跡を淪むと雖も、識は密にして鑿も亦た洞し。

沈醉は照きを埋むるに似、寓辞は諷を託するに類す。……

とあるのに拠り、「至慎」が緻密な洞察に裏打ちされている

ると同時に、「玄遠」が諷刺を含む寓辞であることも知っていたと考えられる。後に李善も「志は刺譏に在る」ようであると言ったが、鮑照が、以上のような阮籍の人物像および作風に興味を抱いていたであろうことは、推測に難くない。阮籍の作品の代表である『詠懷詩』其一を擬作の対象に選んだ動機も、鮑照には無い、この「保持の助」との関連から浮かび上がる。すなわち、「保持」を得るには、諷刺を効かすにも、「隱避」（李善による評語）な表現形式を用いる阮籍の詩風の典型として、『詠懷詩』其一を評価しておきたかったためであろう。

最後に、結論として纏めておくと、擬作詩は、晋の傅玄の『擬四愁詩』をはじめ、陸機の『擬古』十四首、梁の江淹の『雜體』三十首などに代表されるように、本来、原作に対する批評的意味をもつ。鮑照もその流れの上にあつて、数首の擬作詩を作り、古人やその詩の体を批評するが、その中で、『擬阮公夜中不能寐』詩は、阮籍の『詠懷詩』其一の「寓辞」（顔延之による評語）を評価したものであつた。鮑照は、恐らく作詩当時、太子劭の文帝弑逆事件を背景に台頭してきた孝武帝劉駿や鮑照の当時のパトロン格であつた柳元景らに、かつての恩人である始興王劉濬が誅される場面に際会し、（手出し口出しのできない）複雑な気持ちを抱いていた。そこで、パトロンの「保持の助」を失

わず、諷刺を効かせる方策として、それが最も有効な『詠懷詩』其一の表現形式を見出し、原作との対置効果を抽き出すべく言い換え、自己の文学観にひき付けて擬作したのである。それは、原作の「寓辞」を全面的に評価するのではなく、例えば、擬作の中で「夜」の概念を明確化し、また「繁憂を乱らす」や「絶えて儔無し」など、感情や状況の解釈をも加えたところに見られる。原作のような、「隱避」（李善による評語）な表現が多く、却つて「情を以て測り難き」（李善による評語）部分は避けようとしたためであろう。

梁の鍾嶸は、『詩品』中品に鮑照の文学観をとらえ、……巧似を貴尚し、危仄を避けず、頗る清雅の調を傷ふ。故に險俗を言う者は、多く以て照に附く。と言う。また、『宋書』劉義慶傳に鮑照が故意に「鄙言累句」の多い詩を作つたとあり、民歌の俗語表現をそのまま用いるなど、鍾嶸に「險俗」と評されるような通俗的な文学観を、鮑照は確かにもっている。しかし彼のこの傾向は、典故が少なく、雕琢の過多でない、かつ鳥類などを用いた比興表現と相俟つた素朴さを生み出していることも確かである。それは、幾分かの雕琢の跡をのこし、「清雅の調を傷ふ」にしても、即物的で絵画的な「巧似」をたつとぶ文学観と無関係でない。原詩の「隱避」な表現を全面的に評価しなかつたのは、この文学観によるものであると考えた

い。自らの擬作が原作と対比されることも意識し、自分の根底にある「巧似を貴尚する」文学観に基づいて、原作を暗々裏に批評しながらも、追隨の困難な「隱避」な「寓辞」の文学を標榜しようとしたところに、鮑照のこの擬作の意図もあつたように思う。

## 注

- 1 吉川幸次郎氏「阮籍の詠懐詩について」（筑摩叢書94『中国詩史』上所収）に負うところ大である。
- 2 「翔」は『文選』に「朔」に作る。
- 3 「文選」卷二十七の胡氏考異は「長歌行」に改める。
- 4 拙稿「古詩十九首」の擬作詩——其三について——（広島大学附属中・高等学校『国語科研究紀要』第十六号所収）を参照されたい。
- 5 『立命館文學』三六四・三六五・三六六号所収。
- 6 「襟」は『文選』に「衿」に作る。
- 7 散騎侍郎虞炎奉教撰『鮑照集』序に、「儲皇（文惠太子蕭長懋）博採羣言、遊好文藝、片辭隻韻、罔不收集。照所賦述、……年代稍遠、零落者多、今所存者、僅能半焉。」とある。この序は南齊の建武二年（四九五年）に書かれた。
- 8 鮑照の『秋夜』二首・其一の「幸承天光轉、曲景入幽堂。徘徊集通隙、宛轉燭迴梁。……」は、寓意的に捉えれば、つけ入る隙の意であろう。
- 9 「表」はテキストによつては「疏」に作る。鮑照の「表」と「疏」には、しばしば混乱が見られる。
- 10 「困」は張溥本に「因」に作る。

- 11 朱起鳳の「辞通」に詳しい。
- 12 拙稿「傅玄『擬四愁詩』考」（東方書店刊『古田教授遺言記念 中国文学語学論集』所収）を参照されたい。
- 13 『文選』登載の十二首に、「駕言出北闕」で始まる「擬驅車上東門」詩および「遼遊出西城」で始まる「擬迴車駕言邁」詩の二首を加える。
- 14 高橋和巳氏「陸機の伝記とその文学」および「江淹の文学」ともに河出書房新社刊・高橋和巳作品集9『中国文学論集』所収）に批評の観点でとらえた論者が見られる。
- 15 胡国瑞氏『魏晋南北朝文学史』（上海文藝出版社刊）第四章、第三節・鮑照に、「它們（『行路難』）在語言上也表現着很大的民歌特色、如「富貴不由人」・「莫惜床頭百個錢」、簡直是口頭俗語、所以鍾嶸批評他「險俗」。」と言う。
- 16 中国科学院文学研究所中国文学史編写組編写『中国文学史』（人民文学出版社刊）一、魏晋南北朝文学、第六章・南朝作家、第三節・鮑照に、「此外也有一些較為朴素流暢可誦的抒情詩、如『贈傅都曹別』、……（中略）……全詩純用禽鳥來比喻自己和傅的關係、……（中略）……詩中很少典故、也沒有雕琢過甚之處、藝術上相當完整。又如『日落望江贈荀丞』也是基本上用朴素的詞句來抒情和写景之作、運用比興饒有餘味。」と言う。
- 17 同上『中国文学史』に、「這封信（『登大雷岸与妹書』）用瑰麗奇崛的筆調、模繪了旅途的景物。体物写貌、力求巧似、很能生動地傳達出山川的神態、所以有些評論者甚至認為名画家李思訓的図画也難及這篇文章精工。例如、其中写廬山的一節、……（以下省略）……」と言う。